
イファン～閑話～

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イファン〜閑話〜

【Nコード】

N0267S

【作者名】

沙希

【あらすじ】

現在連載中の『イファン』の番外編です。連載作品となっておりますが、一話読み切りです。本編を未読の方には内容がほとんどわからないものになってきていると思います。また本編のネタバレをファンダに含みます。よろしければ、本編『イファン』に一度目を通してくださると嬉しいです。時々、真面目でシリアス、時々お笑いな感じの短編集です。（旧サイトから転載し、こちらで発表しています）

恋愛小説（前書き）

本編3章の『守るという意味2』の中でのイファンとティタンの会話の続き。

恋愛小説

ラオンが用意したお茶を飲みながら、イファンとヤジユは会話を楽しむ。その内容は多岐にわたっていた。数年ぶりの再会であるから、それもそのはずだった。

「そういえば、ティタン」

「なに？」

「ノイ先生が貸して下さったカシ国の物語で面白いことが書いてあったの」

「ちなみにどんな物語？」

「恋愛」

聞いた瞬間、ティタンはお茶を噴出しそうになった。

「恋愛！？……そ…それはあの人の人物像とはずいぶんとまたかけ離れた……………」

あの感情の起伏の少なそうな女性が恋愛小説を所持しているとは考えにくい。一体どんな内容なのかは知らないが、男女の恋物語に感動するノイの姿など想像できない。

「あ、もちろんノイ先生の持ち物ではないわ。ローズさんに何かカシ国の小説が読みたいって頼んでいたの。それをノイ先生が授業のついでに持ってきて下さったのよ」

そう聞いて、ティタンはほっとしてしまった。恋愛小説に熱中するノイの姿など正直……見たくない。

イファンは敬愛するノイ先生に対して失礼な想像をふくらませたティタンを睨んだが、心優しい彼女はそれだけですませてあげた。

だがそれでもティタンはイファンが怖くて、さつさと話題を元に戻すことにした。女性の怒りを買っていいことなどこの世には存在しないのである。

「へえ、そうなのか。で、どんな面白いことが？」

「主人公の男性はとても素敵な人で、その、ようするにたくさんの女性から求愛を受けてきたの」

「へえ」

「で、主人公の前にある日、彼の心を大きくゆさぶる女性が現れたの」

「へえ。イファン、さつきから恥ずかしい言葉を平気で言えるな」

「茶化さないで！小説をチヨニス語に訳したらそうだったのよ！」

「はいはい」

「もう……。それで女性はね、夜空の綺麗な晩にとびきりの笑顔でこう言うの。『あなたはまるであの星のように輝いているのね』」

「ずいぶんゆめみ……。現実にはなかなかいない可憐な子だな」

口が滑ったのを自覚したティタンは慌てて言い直す。

「……………。主人公はそれを聞いて、すごく嬉しくて笑顔を浮かべながら、『君こそ月のように美しい。だからどうかずっとその輝きで星である僕を照らしてほしい』って」

「へえ、随分と陳腐でくっさい作品だな」

「確かにそうなんだけど、論点はそこじゃあないのよ！私ね、思ったの。星が光っていられるのは月のおかげじゃなくて、太陽のおかげじゃない。もちろん自分の力で光る恒星は存在するけど、それはこの場合関係ないでしょ。だからもしかして私、文章を訳し間違えたのかもって思ったんだけど、どう思う？」

たっぷり十秒は考えてティタンは言った。

「……………たぶん君は間違ってるよ。男が天体に関する知識がない馬鹿だったってことだろ」

そしてそんなところに注目するイファンもイファンだと言っ言葉は胸にしまっ。

なぜなら女性を怒らせていいことなど、この世に存在しないことをティタンは彼の十九年の人生でよく学んでいたからである。

小さく大きな姿（前書き）

イファンとヤジユの過去のお話になりますが、
本編のネタバレを含みます。

小さく大きな姿

「父上、どうしてイファンはあんなに泣いているのですか？すごく悲しそうです」

ヤジュとイファンは幼馴染だったが、ここ最近は交流が途絶えがちだった。

チヨニス皇太子お気に入りのお学友として王宮と家を頻繁に行き来するヤジュは十一歳の少年にしては多忙であつたし、イファンも彼女の父ジノの教育方針で家庭教師とともに勉強やチヨニス人女性としての教養を学ぶ日々だった。

二人が一緒に遊ぶ時間は彼らの成長とともに必然的に減っていたが、その理由は忙しさだけではなかった。ヤジュとイファンの顔をあわせる機会が減った最大の理由はヤジュが男に生まれ、イファンが女に生まれたことにある。

チヨニスの上流階級文化では男女が必要以上に親密に時間を共有することははしたないこととされる。

それは非公式であるとはいえ婚約を交わした間柄にもあてはまる。イファンはあくまでヤジュの婚約者であり、家族ではないのだ。裕福な家庭や貴族の家に生まれた娘は家族以外の男性に一生顔を見せないことも珍しくはない。

ヤジュもイファンもまだ子供だが、それでももう幼子と呼ばれる

年齢ではない。

双方の家族の者がそれなりの配慮をするようになるのも当然の流れだった。

そしてそんな理由でここ最近イファンに会っていなかったヤジユは、久しぶりに見た幼馴染の少女の顔に驚いた。

泣き腫らした、今も止まらない涙をこぼす瞳は深い悲しみの色を宿し、どうしようもない苦しみがその顔に表れている。

一目見ただけで、何かあったのだとわかる顔だった。

だからヤジユは思わず自分の横にたつ父サワットに聞いていた。

イファンはどうしてあんなに泣いているのか。

どうしてあんなにも悲しそうなのかと。

「イファンは失ったんだ。大切なものを」

長身のサワットは息子と視野をあわせるために身をかがめ、ヤジユの手を包み込むように握りながらこたえた。

「何を、何をイファンは失ったのです？」

「大切な者をだよ。イファンは大切な、大好きな人と離れ離れになっちゃったんだ」

「……………それは誰です？」

「私の口から誰であるとは言えない。もしどうしても聞きたいのなら、お前はイファンに直接聞かなくてはいけない。でもわかるね？」

それを直接イファンに聞くことが、今の彼女にとってどれだけ辛いことか。

サワツトはそう末まで言わなかった。

だがヤジユは父がそう言いたいのだと理解した。

だからヤジユは一つ頷く。

ヤジユとサワツトの視線が窓辺に置かれた長椅子に座り、涙をぬぐう少女にむけられる。

今のイファンに「誰と離れ離れになってしまったのか」などと聞けるわけがない。

彼女がひどく傷つくのが目に見える。

でもヤジユはこのまま放っておくことはできないと思った。

いつだって自分に笑顔を見せてきた幼馴染が苦痛の色を顔に浮かべているだなんて、許せない。

イファンに一番似合う色は笑顔であり、涙ではない。

イファンが『イファン』であるためなら、何だっけしたい。

「父上、イファンに何があったのか、絶対に聞きません。だからイファンのそばに行ってもいいですか？」

ヤジユはサワツトの顔を真っ直ぐに見る。
少年の表情には真剣さと必死さが同居していた。

「ああ。もちろんだよ」

サワツトは軽く微笑み、ヤジユの小さい背中をイファンにむかって押した。

サワツトは部屋の中にいるであろう人物にむかって大きく声をかけた。

「ジノ！わたしだ。入るぞ」

部屋の入り口にかかる垂れ幕をめくり、サワットは部屋の中に入り込む。

ここは熱帯の国チヨニスの大商人、ジノの屋敷。
そしてここは彼の部屋だった。

「サワットか。出迎えに行かずにすまん。仕事がたまっていて、身動きがとれないでいるんだ」

部屋の真ん中に置かれた机で書類に目を通していたジノは苦笑しながら、サワットに軽く頭を下がる。

サワットは気にするなどでも言つように片手を上げた。

「ヤジュをイファンのところに放り込んできたぞ」

「……………リーラの件といい、今回のイファンのことといい、本当にすまない。礼を言う。ありがとう」

「かまわないさ。そもそもリーラをイファンの家庭教師として紹介したのはわたしだ。

無関係じゃない」

サワットはそう言って、手近な椅子に座り込む。

「イファン、だいぶこたえているようだな。痩せたんじゃないか？あまり食べていないのか？」

「ああ。すっかり食欲もなくなっ
てんだんだ」

だからヤジユを呼

ジノはそう言って、どこか寂しそうに微笑んだ。

ティタンの父(前書き)

本編である『イファン』は完結していませんが、『イファン』の未
来のお話しになります。

ティタンの父

ティタンがマンデルに帰国することになったという知らせをイファンが聞いたのは、台風のような日々が終わり、チヨニスが静けさを取り戻した頃だった。

大切な親友が国に遠い場所へ行ってしまうという事実には、ヤジユもイファンも落胆したが、その分彼が一緒にいる時間は日々増えていた。

そんなある日、テレジアの屋敷で行われた晩餐会に出席した彼らは別室で小さなお茶会を開いていた。サワツトやジノも共に招待されていたが、晩餐会の後彼らは彼らで楽しんでいた。大人たちと子供たちの行動が別々になるのは当然だった。

「彼はジュリアーヌが死んだ後も、ただひたすら彼女だけを愛し、新しく妻をむかえることはありませんでした。 という展開にはならなかったぜ」

ティタンの言葉にイファンは首をかしげる。

日々のささいなことを話していた三人だったが、いつの間にか話題は亡くなったティタンの母のことになっていた。

そして実母ジュリアーヌへの複雑な感情について真剣に語ってい

たテレジアだったのだが、いつの間にか話題の的は父テレジアになっていた。もっとはつきり言えば、テレジアの恋愛遍歴をティタンは語り始めたのである。

「どういうこと?」

「つまり親父の再婚だよ。前に話したかもしれないが、俺が十歳のとき、親父は再婚した。けっこう綺麗な人だったぜ。先妻の息子である俺に対しても、普通に接してくれたし。優しい人だった。俺は新しい母親には何の不满もなかったんだけど、親父は三年後にその人と離婚した」

なんで離婚したんだかな。ティタンはそう呟く。

「それから現在、色んな女と適当に遊んでるな。そろそろいい年なはずなのに。息子の俺がいうのもなんだけど、親父はけっこうもてるぜ」

「つまり、最初の妻への想いを胸に抱いて、墓までもってくような男ではなかったと」

「ヤジユ!!」

ヤジユの失礼な物言いにイファンは声を上げる。が、実父を貶されたはずのティタンは笑って頷いた。

「そのとおり」

でも、とティタンは言葉を続ける。

「間違いなく、親父にとって母上は特別な人だと思う。死んだ人間は美化されがちだけど、そういうことを抜きにしてもさ」

照れくさそうにいうティタンに、イファンとヤジユは心をあたたかくなる。

「なぐんてな。やっぱり、産みの母親だしな。俺の願望だ」

「そんなことない。きっとティタンのお母様はテレジアさまにとっての永遠だよ」

そういつて、イファンは微笑む。

彼女は知っていた。ティタンが母の形見として持つ懐中時計に、テレジアのジュリアーヌへの愛があると。

「……………ありがとう」

ティタンは小さく礼をのべた。

次は俺にやらせてくれ(前書き)

四章『母の形見』後、地下通路でのイファンとティタンのやりとり。

次は俺にやらせてくれ

突き進んだ先で、二人は立ち止まった。

目の前に木製の、古ぼけた扉がある。ティタンは扉の取っ手に手をかけた。

だが扉は開かない。

イファンにランタンを預け、今度は両手に体重をかけ扉を押す。

無理な力をかけられた木製の扉が嫌な音を立てた。

ティタンは眉をひそめ、扉から距離を取る。イファンからランタンを再び受け取り、扉全体に光をあててみる。

「……歪んでる。これじゃ開かないわけだ。スナキどのはどうやってここを通ったんだ？」

「……元々立て付けの悪かった扉をスナキどのが無理やりこじ開けて、扉が変形してしまっただんじやないかしら」

イファンは呟く。

もちろんイファンの考えが正しいか正しくないか、それを答えられる人間は今いない。

ティタンはランタンを足元に置き、腕を組んだ。

「困ったな。さすがにのこぎりは持ってきてないぞ」

そう言いながら腰元に短剣に手をやる。

時間がかかるが扉自体の厚みはそれほどではないようだし、そもそも歪んでいた扉。ティタンは木製の扉が腐敗しているのに気づいていた。傷んだ部分重点的に切り刻めばいい。

「ティタン、大丈夫よ」

「え？」

「行くわよ。離れていて」

ティタンが何かを言う前に、イファンの行動を起こしていた。

彼女が何をしようとしているのか咄嗟に判断したティタンはランタンを抱えて、大きく後ろに下がる。

木製の扉は腐敗のためか、あっけなく破け散った。

イファンの華麗なる足蹴りは鮮やかなものだった。

イファンは軽く乱れた息を整え、服にかかった木片を手ではらう。そうしてあっけにとられるティタンを残して先に扉のだったものの中に入った。いった。

勇ましいイファンの後姿に、思わずティタンは呟く。

「イファン……頼むから次は俺にやらせてくれ」
（……ヤジユ。お前、きつと将来苦労するぞ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0267s/>

イファン～閑話～

2011年10月8日02時28分発行